



平成28年度 第2回 対馬暖流系マアジ・さば類・いわし類長期漁海況予報

— 別表の水産関係機関が検討し国立研究開発法人水産研究・教育機構
西海区水産研究所がとりまとめた結果 —

今後の見通し(平成29年4月～9月)のポイント

海況

- (1) 薩南海域における黒潮北縁域の位置は4月には「接岸傾向」となるが、全般的には「屋久島南付近」で変動する。
- (2) 東シナ海から九州・日本海西部沿岸域にかけての表層水温は、全般的には「平年並み～やや高め」で経過する。

※引用符「 」で囲んで表した平年比較の水温の高低の程度は以下のとおり。

「やや」 : 約3年に1回程度の出現確率

「平年並み」 : 約2年に1回程度の出現確率

漁況(来遊水準)

- (1) マアジは前年並み。
- (2) マサバは前年を下回る。
- (3) ゴマサバは前年並み。
- (4) マイワシは前年を下回り、平年並み。
- (5) ウルメイワシは前年並みで、平年を上回る。
- (6) カタクチイワシは前年・平年を下回る。

※「前年」は平成28年4月～9月。「平年」は過去5年の平均値。

問い合わせ先

国立研究開発法人水産研究・教育機構 西海区水産研究所

担当：業務推進部 青野、小林

漁況：資源海洋部 永澤、高橋

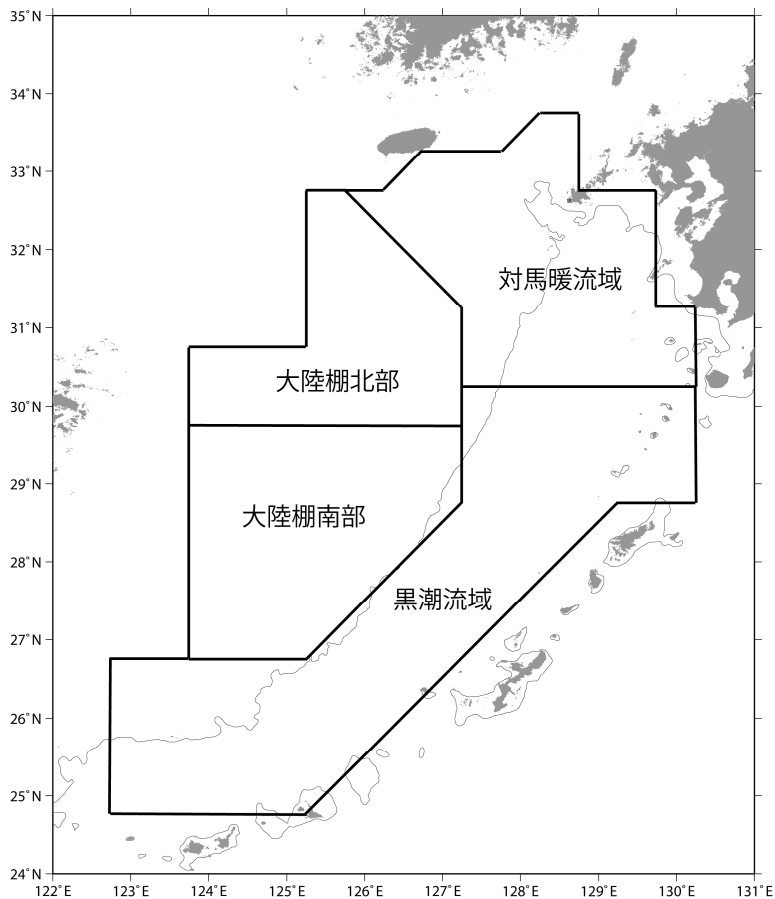
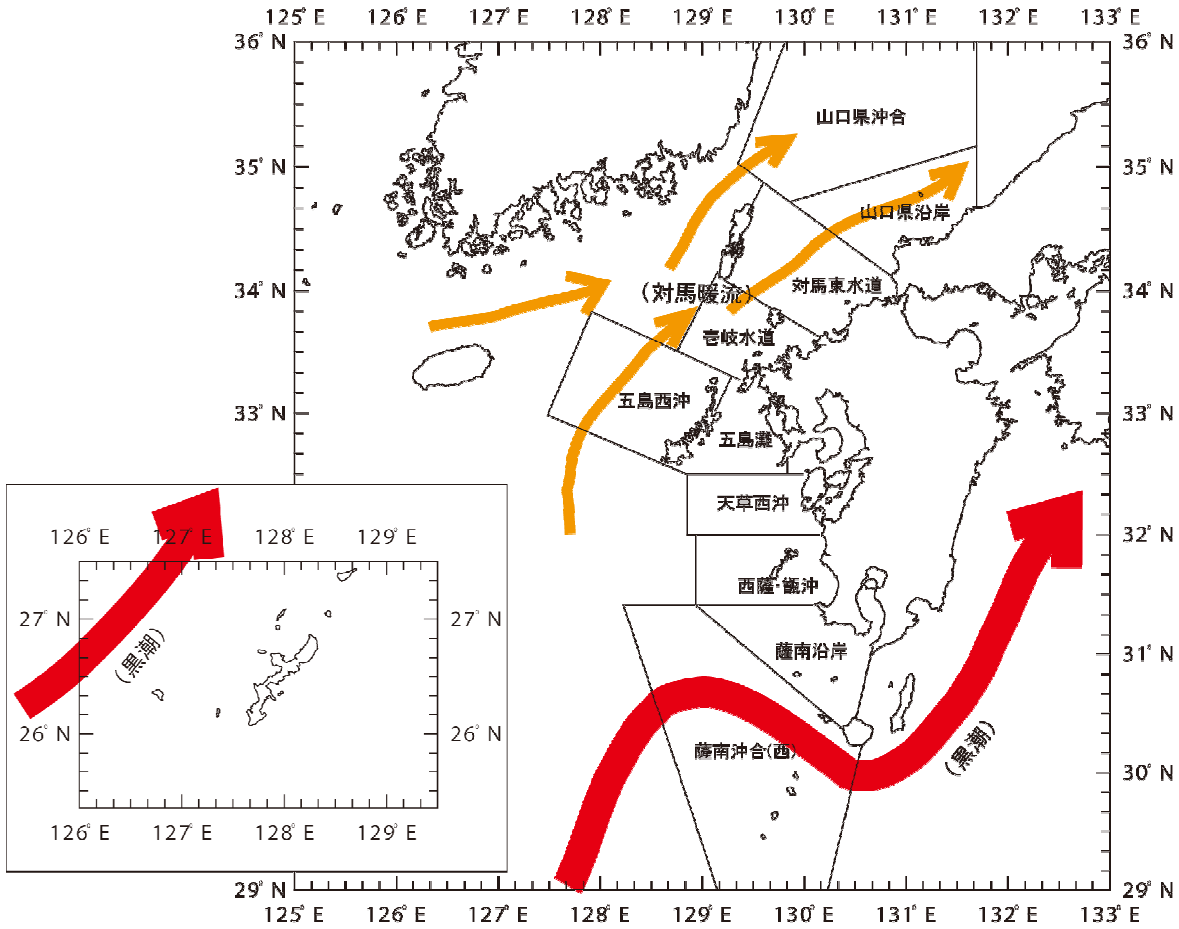
海況：資源海洋部 永澤、種子田

電話：095-860-1600、ファックス：095-850-7767

当資料のホームページ掲載先URL

<http://abchan.fra.go.jp/>

予報対象海域



西海ブロック海況予報

1. 今後の見通し (2017年4月～9月)

(1) 海流

薩南海域における黒潮北縁域は離接岸を繰り返しながら、4月には「接岸傾向」となるが、全般的には「屋久島南付近」で変動する。

(2) 表層水温

山口県沿岸・沖合、対馬東水道、壱岐水道、五島西沖、五島灘、黒潮流域は「やや高め」、天草西沖、西薩・甌沖、薩南沿岸、薩南沖合、沖縄島周辺海域、大陸棚上は「平年並み～やや高め」で経過する。

2. 経過 (2016年10月～2017年3月)

1. 大陸棚上

(1) 海面水温

北部：10月「かなり高め」、11月「やや高め」、12・1月「かなり高め」、2月「平年並み」。

南部：10・11月「はなはだ高め」、12・1月「かなり高め」、2月「やや高め」。

2. 黒潮流域

(1) 海流

薩南海域における黒潮北縁域は、10月は「屋久島南付近での変動(平均的な位置)」、11月は「接岸傾向」、12月は「屋久島南付近での変動(平均的な位置)」、1月は「接岸傾向」、2月は「離岸傾向」で経過。

(2) 海面水温

10月「かなり高め」、11月～1月「はなはだ高め」、2月「かなり高め」。

3. 対馬暖流域・沿岸域

(1) 表層水温

山口県沖合：10月「かなり低め」、11月「平年並み」、12月「やや高め」、1月「やや低め」、2・3月「平年並み」。

山口県沿岸：10月「やや低め」、11月「平年並み」、12月「かなり高め」、1月「平年並み」、2・3月「かなり高め」。

対馬東水道：10月「やや低め」、11月「平年並み」、12月「かなり高め」、1月～3月「やや高め」。

壱岐水道：11月「かなり高め」、2・3月「やや高め」。

五島西沖：11月「平年並み」、2月「やや高め」。

五島灘：11月「平年並み」、2月「やや高め」。

天草西沖：11月「やや高め」、1月「かなり高め」。

西薩・甌沖：11月「平年並み」、1月「やや高め」。

薩南沿岸：11月「やや高め」、1月「平年並み」。

薩南沖合：11月「かなり高め」、1月「やや高め」。

沖縄島南東：11月「かなり高め」、3月「やや低め」。

(2) 表層塩分

山口県沖合：10月「やや低め」、11月「平年並み」、12月「かなり低め」、1月「平年並み」、2・3月「やや低め」。

山口県沿岸：10月「平年並み」、11月「やや高め」、12月～3月「平年並み」。

対馬東水道：10月～12月「平年並み」、1月「やや低め」、2・3月「平年並み」。

壱岐水道：11月「平年並み」、2月「やや低め」、3月「やや高め」。

五島西沖：11月「やや高め」、2月「平年並み」。

五島灘：11月「やや低め」、2月「平年並み」。

天草西沖：11月「やや低め」、1月「平年並み」。

西薩・甌沖：11月「やや低め」、1月「平年並み」。

薩南沿岸：11・1月「平年並み」。

薩南沖合 : 11月「平年並み」、1月「やや高め」。
沖縄島南東 : 11月「やや高め」、3月「かなり高め」。

3. 現況 (2017年3月中旬)

(1) 大陸棚上

海面水温は北部「平年並み」、南部「平年並み」。

(2) 黒潮流域

薩南海域の黒潮北縁域は「屋久島南付近での変動(平均的な位置)」。海面水温は「かなり高め」。

(3) 対馬暖流域

海面水温は「やや高め」。

(注) 引用符「 」で囲んで表した平年比較の水温・塩分の高低の程度は以下のとおり。

「はなはだ」 : 約22年に1回程度の出現確率

「かなり」 : 約7年に1回程度の出現確率

「やや」 : 約3年に1回程度の出現確率

「平年並み」 : 約2年に1回程度の出現確率

東シナ海～日本海西南域マアジ・さば類・いわし類長期漁況予報

今後の見通し（2017年4月～9月）

対象海域：東シナ海～日本海西南海域

対象漁業：まき網、定置網、その他

対象魚群：0歳魚（2017年級群（2017年生まれ））、1歳魚（2016年級群）、2歳魚（2015年級群）。
魚の大きさは、マアジ・さば類は尾叉長、いわし類は被鱗体長で表示。

1. マアジ

(1) 来遊量：前年並み。沖合域の漁況は前年並みで、沿岸域の漁況は前年・平年並み。

(2) 漁期・漁場：期間を通して、対馬沖、東シナ海中・南部、沿岸域が漁場となる。

(3) 魚体：15～25cmの1歳魚（ゼンゴ・小銘柄）が主に、5～15cmの0歳魚（豆・ゼンゴ銘柄）と25cm以上の2歳魚以上（中・大銘柄）も漁獲される。

2. マサバ

(1) 来遊量：前年を下回る。沖合域の漁況は前年を下回り、沿岸域の漁況は前年・平年並み。

(2) 漁期・漁場：期間を通して、対馬沖、東シナ海中・南部、沿岸域が漁場となる。

(3) 魚体：漁期前半は26～31cmの1歳魚（豆・小銘柄）と32cm以上の2歳魚（小・中銘柄）が、漁期後半はさらに15～25cmの0歳魚（豆銘柄）が主に漁獲される。

3. ゴマサバ

(1) 来遊量：前年並み。沖合域の漁況は前年並み、沿岸域の漁況は前年・平年並み。

(2) 漁期・漁場：期間を通して、東シナ海中・南部、鹿児島県の沿岸域が漁場となる。

(3) 魚体：沖合域では15～28cmの0歳魚（豆銘柄）と28～32cmの1歳魚（豆・小銘柄）が主に漁獲される。沿岸域では30～37cmの1～3歳魚（小～中銘柄）が主に漁獲される。

4. マイワシ

(1) 来遊量：前年を下回り、平年並み。

(2) 漁期・漁場：長崎県以南の沿岸域が漁場となる。

(3) 魚体：漁期前半は15～19cmの1歳魚（中・大羽銘柄）と2歳魚以上（中・大羽銘柄）が主に漁獲される。漁期後半は15cm以下の0歳魚（小・中羽銘柄）が主に漁獲される。

5. ウルメイワシ

(1) 来遊量：前年並みで平年を上回る。

(2) 漁期・漁場：漁期の後半（7月～9月）が主体となる。長崎県以南の沿岸域が漁場となる。

(3) 魚体：漁期前半は18cm以上の1・2歳魚（大羽銘柄）が、漁期後半は5～15cmの0歳魚（小・中羽銘柄）が主に漁獲される。

6. カタクチイワシ

(1) 来遊量：前年・平年を下回る。

(2) 漁期・漁場：主に5月～8月に沿岸域に漁場ができる。

(3) 魚体：4月は10cm以上の1・2歳魚（大羽銘柄）に3～6cmの0歳魚（カエリ・小羽銘柄）が混じり、5月以降は5～10cmの0・1歳魚（カエリ～大羽銘柄）が主に漁獲される。

注：「前年」は2016年4月～9月。「平年」は過去5年の平均値。「並み」はCPUE等指標値の±20%の範囲。
沖合域とは大中型まき網が操業する対馬周辺から東シナ海。

漁況の経過（2016年10月～2017年1月）および見通しについての説明

1. 資源状態

(1) マアジ対馬暖流系群

東シナ海・日本海に生息するマアジの資源量は、1970年代後半に低水準にあったが、1980・1990年代前半に増加し、1993年～1998年には50万トンを超えた。その後、資源量は減少し、1999年～2002年には30万～40万トンだったが、2003年、2004年には増加し、再び50万トンを超えた。2005年以降は40万トン前後で推移していたが、2015年資源量は増加して53万トンであった。

東シナ海・日本海（青森県～鹿児島県）での我が国のマアジ漁獲量は、1973年～1976年には9万～15万トンであったが、その後減少し、1980年に4万トンまで落ち込んだ。1980・1990年代は増加傾向を示し、1993～1998年には約20万トンを超えたが、1999年～2002年は14万～16万トンに減少した。2003年から漁獲量は再び増加し、2004年には19万トンであったが、2006年以降はほぼ横ばいで、2015年は13万トンであった。

(2) マサバ対馬暖流系群

東シナ海・黄海・日本海に生息するマサバの資源量は、1970年代から1990年代半ばまで、100万トン前後で比較的安定していたが、その後増減を繰り返し2000年以降は50万トン前後に留まっている。しかし、2014年以降の高加入により資源量は急増し、2015年の資源量は77万トンであった。

東シナ海・黄海・日本海での我が国のマサバの漁獲量は、1970年代後半は30万トン前後であったが、1990年代初めに15万トンほどに落ち込んだ。その後、1996年に41万トンまで増加したが、2000年以降、概ね8～12万トンの低い水準で推移している。近年の漁獲量は、2010年より減少傾向にあり、2013年に6万トンと過去最低の値となったが、その後増加に転じ、2015年は12万トンであった。

(3) ゴマサバ東シナ海系群

東シナ海から日本海西部に生息するゴマサバの資源量は、1992年以降、比較的安定しており、10万～20万トン程度で推移している。近年では、2012年以降、緩やかに減少し、2015年の資源量は10.2万トンであった。

東シナ海・日本海での我が国のゴマサバの漁獲量は、年変動はあるものの、1970年代以降およそ5万トン前後で推移している。近年では、2011年の4万9千トンピークに減少傾向にあり、2015年の漁獲量は3万1千トンだった。

(4) マイワシ対馬暖流系群

東シナ海・日本海に生息するマイワシの資源量は、1970年代に増加し、その後1980年代にかけて高い水準にあったが、1990年代に急激に減少し、2001年～2003年には過去最低水準となった。2004年以降は増加傾向にある。とくに2010年以降は大きく増加している。

東シナ海・日本海での我が国のマイワシの漁獲量は、1983年から1991年までは100万トン以上と多かったが、その後、急激に減少した。2001年～2003年に漁獲量は1千トン程度で推移した。2004年以降は漁獲量が増加傾向にあり、2014年に9千トンに減少したが、その後は増加に転じ、2015年は6万9千トンであった。

(5) ウルメイワシ対馬暖流系群

東シナ海・日本海に生息するウルメイワシの資源量は、1970年代後半と1980年代後半に多く、1980年代前半および1990年代後半から2000年代前半には少なかった。近年では2003年以降増加傾向にあったが、2014年に大きく減少した。

東シナ海・日本海での我が国のウルメイワシの漁獲量は、1981年から1989年にかけて徐々に増加し、1989年～

1993年は4万トン前後で推移したものの、その後減少した。2000年に1万3千トンとなった後は増加傾向を示している。2014年に2万5千トンに減少したが、再び増加に転じ、2015年は4万2千トンであった。

(6) カタクチイワシ対馬暖流系群

東シナ海・日本海に生息するカタクチイワシの資源量は、1970年代から1980年代後半までは低く、1980年代後半から増加し始めた。1998年～2000年の資源量水準は推定されている期間の中で高位であった。その後、資源量は2004年まで減少した後、2007年にかけて増加したものの、2008年以降、再び減少傾向を示した。2011年以降の資源量は低い水準で横ばい傾向にある。

東シナ海・日本海での我が国のカタクチイワシの漁獲量は、1982年に7万3千トンとなった後1990年まで減少した。その後、漁獲量は徐々に増加し、1998年～2000年には12万トン以上となった。2004年にかけて漁獲量が減少したものの、その後は再び増加し、2008年には9万7千トンとなった。近年の漁獲量は、2008年より減少したものの、2010年より横ばい傾向にあり、2014年は6万5千トン、2015年は6万6千トンであった。

2. 漁況の経過

2016年11月～2017年1月の大中型まき網漁業の漁場は、対馬沖が主体であった。この間の、大中型まき網漁船の九州主要港への水揚量は、全魚種合計2万6千トンで前年(2015年11月～2016年1月、4万2千トン)を下回った。マアジは5千トンで前年(1万5千トン)を下回り、さば類は1万5千トンで前年(2万4千トン)を下回った。

山口県～鹿児島県地先における沿岸漁業の漁況は、表1の通りである。マアジの漁獲量は海域によって差があるが、全体としては前年・平年を上回った。漁獲の主体は17～25cmの1歳魚と17cm以下の0歳魚であった。マサバは、前年並み、平年を上回った。漁獲の主体は20～33cmの0～2歳魚であった。ゴマサバは、前年・平年並みであった。漁獲の主体は28～39cmの0～3歳魚であった。マイワシは、好調だった前年を下回り、平年を上回った。漁獲の主体は15cm以下の0歳魚であり、昨年よりも小型であった。ウルメイワシは、好調だった前年並みで、平年を上回った。10～15cmの0・1歳魚を主体に20cm程度の1・2歳魚も漁獲された。カタクチイワシは、前年・平年を下回った。漁獲の主体は5～10cmの0歳魚であった。

3. 今後の見通しの説明 ※今後の見通し参考図も参照のこと

(1) マアジ

例年、4月～9月期には1歳魚(ゼンゴ・小銘柄)が漁獲の主体で、0歳魚(豆・ゼンゴ銘柄)、2歳魚以上(中・大銘柄)も漁獲される。2015年級群は2014年級群を下回る豊度と考えられ、2016年級群は2015年級群並みの豊度と考えられる。2017年級群の豊度を予測するのは難しいが、東シナ海における着底稚魚の分布量(0歳魚の資源量指標値の一つとなっている)と高い相関が見られる4月半ばの好適水温帯面積*は、2017年(予測値)は2016年並みであったことから、2017年級群の豊度は2016年級群並みと考えられる。主体となる1歳魚の来遊量が前年並みであることを反映して、全体の来遊量は前年並みと考えられる。

沖合域の漁況の指標となる大中型まき網のCPUE(1日1隻当り漁獲量)は、2012年～2015年は変動しながら増加傾向にあったが、2016年は減少した。沖合域の漁況は、漁獲の主体となる1歳魚の来遊量が前年並みであることから、前年並みと考えられる。一方、沿岸域の漁況の指標となる代表的な沿岸漁業の漁獲量は、2012～2015年は増加傾向だったが、2016年は減少した。沿岸域の漁況は、直近までの漁獲状況から判断して前年・平年並みと考えられる。

*好適水温帯面積：東シナ海の着底稚魚調査結果の解析に基づく計算海域における表層水温18～22℃の面積。

(2) マサバ

例年、4月～9月期はマサバの盛漁期にあたらないため、漁獲は低調に推移するが、前半は1歳魚（豆・小銘柄）が漁獲の主体で、後半には0歳魚（豆銘柄の一部）も漁獲される。2015年級群の豊度は2014年級群より低く、2016年級群の豊度も2015年級群より低いと考えられる。2017年級群の豊度を予測するのは困難であるが、親魚量の水準は横ばい傾向で、初期生残の良否に関わる環境要因の指標と見られる水温（東シナ海中部、2月）が、2017年は2016年より高いため（水温が低いと初期生残に有利）、2016年級群より低いと見積もるのが妥当であろう。これらから、全体の来遊量は前年を下回ると考えられる。

来遊量が前年を下回ることを反映して、沖合域の漁況は前年を下回ると考えられる。沿岸域の漁況は直近までの漁獲状況から判断して、前年、平年並みと考えられる。

(3) ゴマサバ

例年、4月～9月期には1歳魚（豆・小銘柄）が漁獲の主体で、0歳魚（豆銘柄の一部）も漁獲される。2015年級群の豊度は2014年級群並みで、2016年級群の豊度は2015年級群より高いと考えられる。2017年級群の豊度を予測するのは困難であるが、親魚量の水準は横ばい傾向で、初期生残の良否に関わる環境要因の指標と見られる水温（東シナ海中部、1月）が、2017年は2016年と同様に高いため（水温が高いと初期生残に有利）、2016年級群並みと見積もるのが妥当であろう。これらから、全体の来遊量は前年並みと考えられる。

近年、沖合域の漁況の指標は変動が大きいですが、来遊量が前年並みであることを反映して、沖合域の漁況は前年並みと考えられる。沿岸域の漁況は直近までの漁獲状況から判断して、前年・平年並みと考えられる。

(4) マイワシ

例年、4月～9月期の前半は1歳魚以上（中・大羽銘柄）が、後半は0歳魚（小・中羽銘柄）が主に漁獲される。これまでの漁況の経過より、2015年級群の豊度は2014年級群よりも高く、2016年級群の豊度は2015年級群と同程度以上と考えられる。2017年級群の豊度を予測するのは困難であるが、近年の水準を維持するものと考えられる。昨年は、8月にマイワシが長崎県近海に来遊し豊漁となった。これが、資源豊度のみによるものではなく、海洋環境や魚群の移動といった来遊条件により一時的に生じたものと考え、今期の来遊量は好調だった前年を下回り、平年並みと考えられる。

(5) ウルメイワシ

例年、4月～9月期の前半は1・2歳魚（大羽銘柄）が、後半に0歳魚（小・中羽銘柄）が主に漁獲される。これまでの漁獲状況等から、2016年級群の豊度は2015年級群と同程度で、2014年級群より高いと考えられる。2017年級群の豊度を予測するのは困難であるが、2016年級群と同程度の豊度であり、漁獲量の季節的な増減傾向が平年と同程度であると仮定すると、全体の来遊量は前年並みで平年を上回ると考えられる。

(6) カタクチイワシ

例年、4月～9月期には4月に1・2歳魚（大羽銘柄）が、5月以降に0歳魚（カエリ・小羽銘柄）主体に1歳魚（大羽銘柄）混じりで漁獲される。2016年級群の春季発生群の豊度は2015年級群の春季発生群の豊度並みと考えられる。2016年級群の秋季発生群の豊度は2015年級群の秋季発生群を下回ると考えられる。2017年級群の春季発生群の豊度を予測するのは困難であるが、2016年級群の豊度と同程度と見積もると、全体の来遊量は前年・平年を下回ると考えられる。

表1. 沿岸域の漁況経過（2016年11月～2017年1月、一部2016年9月、10月、2017年2月も含む）

	マアジ	マサバ	ゴマサバ
山口県	中型まき網漁業で327トンの水揚げがあり、前年・平年並みであった（前年比92%、平年比95%）。棒受網、すくい網漁業では、ほとんど水揚げされなかった。	中型まき網漁業で460トンの水揚げがあり、前年・平年を上回った（前年比181%、平年比272%）。	
福岡県	代表港中型まき網漁獲量は74トンで、前年比182%、平年比90%と前年を上回り、平年並みであった。漁獲の93%を、中、小銘柄が占めた。棒受網での漁獲量は1.1トンで、前年比121%、平年比21%と前年を上回り、平年は下回り不漁であった。漁獲全てが小銘柄であった。小型定置網の漁獲量は0.1トンで、前年比6%、平年比4%と不漁であった。	代表港中型まき網漁獲量は16トンで、前年比30%平年比14%と不漁であった。漁獲の37%を小銘柄が占めた。棒受網での漁獲量は1.0トンで、前年比79%平年比390%と好漁であった。小銘柄が100%となった。	代表港中型まき網漁獲量は17トンで、前年比48%平年比20%と不漁であった。
佐賀県	前年・平年を下回った（前年比79%、平年比59%）。	前年・平年を上回った（前年比281%、平年比320%）。	
長崎県	地域により差があるが、前年並みで、平年を上回った（前年比115%、平年比135%）。	地域により差があるが、前年を上回り、平年並みであった（前年比133%、平年比118%）。	
熊本県	牛深港の水揚量は134.6トンで前年比83%（162.9トン）、平年比110%（122.0トン）であった。	牛深港の水揚量は521.2トンで前年比158%（329.8トン）、平年比161%（323.9トン）であった。	
鹿児島県	主要4港のまき網の水揚げ合計は1,197トンで、前年・平年を上回った（前年比287%、平年比208%）。	枕崎漁港のまき網の水揚げ合計は175トンで、前年・平年を下回った（前年比22%、平年比79%）。	枕崎漁港のまき網の水揚げ合計は1,462トンで、前年並みで、平年を下回った（前年比85%、平年比72%）。

注：「前年」は2015年11月～2016年1月、「平年」は過去5年の平均値。

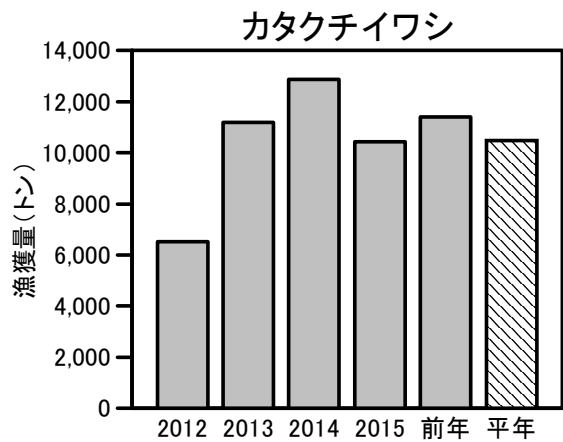
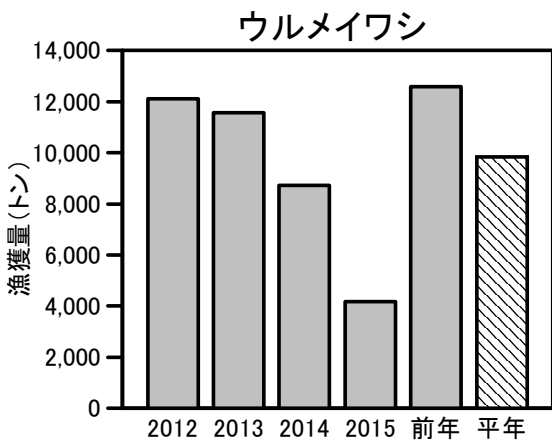
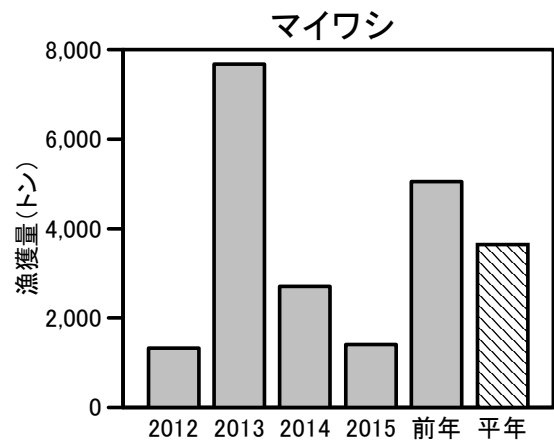
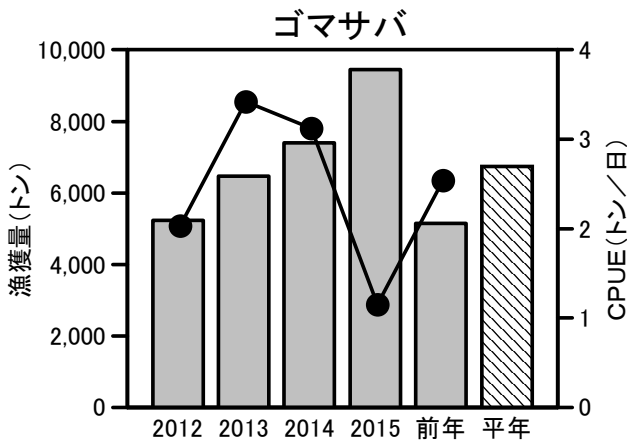
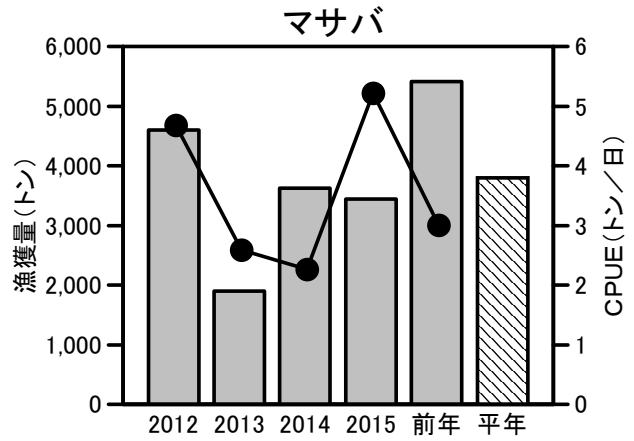
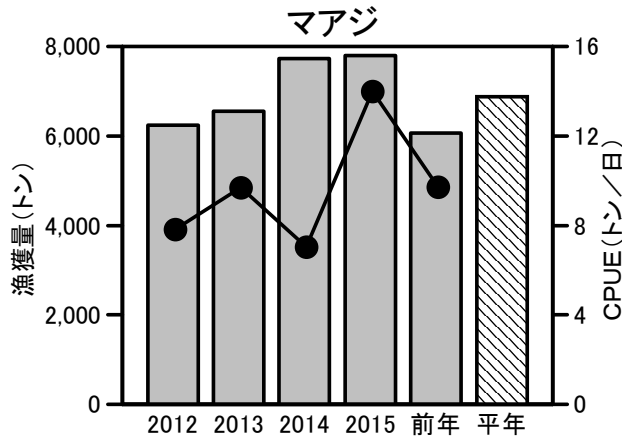
山口県・佐賀県・長崎県・熊本県に水揚げされたさば類はすべてマサバとみなした。

表1. 沿岸域の漁況経過（2016年11月～2017年1月、一部2016年9月、10月、2017年2月も含む）続き

	マイワシ	ウルメイワシ	カタクチイワシ
山口県	水揚げされなかった（前年・平年ほとんど水揚げなし）。	水揚げされなかった（前年・平年ほとんど水揚げなし）。	棒受網・すくい網漁業で137トンの水揚げがあり、前年を上回り、平年並みであった（前年比125%、平年比115%）。
福岡県	代表港中型まき網漁獲量はなかった。棒受網での漁獲量はなかった。	代表港中型まき網漁獲量は0.5トンで前年比327%平年比6%と不漁であった前年よりよかったものの、平年と比べると不漁であった。棒受網での漁獲はなかった。	代表港中型まき網での漁獲はなかった。棒受網漁獲量は5.6トンで前年比34%、平年比30%と、不漁であった。
佐賀県	前年を上回り、平年を下回った（前年比1600%、平年比58%）。	水揚げはなく、前年・平年を下回った。	前年を上回り、平年並みであった（前年比160%、平年比87%）。
長崎県	地域により差があるが、前年・平年を上回った（前年比519%、平年比456%）。	地域により差があるが、前年並みで、平年を上回った（前年比116%、平年比345%）。	地域により差があるが、前年・平年を下回った（前年比63%、平年比63%）。
熊本県	牛深港の水揚量は271.2トンで前年比45%（608.2トン）、平年比84%（324.4トン）であった。	牛深港の水揚量は1478.2トンで前年比102%（1,448.9トン）、平年比106%（1400.3トン）であった。	牛深港の水揚量は167.7トンで前年比16%（1,081.1トン）、平年比25%（669.7トン）であった。
鹿児島県	主要4港のまき網では、期間中合計で657トンの水揚げで、前年・平年を下回った（前年比14%、平年比53%）。北薩海域の棒受網では2トンの水揚げがあり、前年・平年を大きく下回った（前年比6%、平年比4%）。	主要4港のまき網では、期間中合計で、1,922トンの水揚げで前年を下回り、平年並であった（前年比49%、平年比89%）。北薩海域の棒受網では、534トンの水揚げがあり前年・平年を上回った（前年比204%、平年比209%）。	主要4港のまき網では、甑西、天草沖を中心に漁獲があり、期間中合計で、498トンの水揚げで、前年・平年を下回った（前年比29%、平年比42%）。北薩海域の棒受網では14トンの水揚げで、前年・平年を下回った（前年比23%、平年比27%）。

注：「前年」は2015年11月～2016年1月、「平年」は過去5年の平均値。

山口県・佐賀県・長崎県・熊本県に水揚げされたさば類はすべてマサバとみなした。



今後の見通し参考図

沿岸漁業の漁獲量（沿岸漁況の指標の一つ；棒グラフ）と大中型まき網の1日当たりの漁獲量（沖合漁況の指標の一つ；折れ線グラフ、CPUE）。沿岸漁業の漁獲量は、マサバは山口県～熊本県のさば類漁獲量（ゴマサバを含むが主にマサバ）と鹿児島県（枕崎港・阿久根港）のマサバ漁獲量の合計値、ゴマサバは鹿児島県（枕崎港・阿久根港）のゴマサバ漁獲量、その他は山口県～鹿児島県の主要沿岸漁業漁獲量。4月～9月。平年は過去5年平均。

参 画 機 関

山口県水産研究センター	鹿児島県水産技術開発センター
福岡県水産海洋技術センター	沖縄県水産海洋技術センター
佐賀県玄海水産振興センター	一般社団法人 漁業情報サービスセンター
長崎県総合水産試験場	(取りまとめ機関)
熊本県水産研究センター	国立研究開発法人 水産研究・教育機構 西海区水産研究所